



渡り鳥が「つなぐ」 湿地の恵み

この冊子は、バードライフ・インターナショナル東京が、佐賀県佐賀市、山口県周南市、宮城県大崎市の協力を得て作成しました。また、「公益信託大成建設自然・歴史環境基金」の助成を受けて作成しました。

デザイン・イラスト：いきものパレット
写真提供：佐賀県佐賀市、山口県周南市、宮城県大崎市、
バードライフ・インターナショナル東京


BirdLife
INTERNATIONAL

いろいろな“湿地”とその恵み

いきものにとって、人にとって、なくてはならない場所

それぞれの湿地は、多くのいきものによって利用されています。もちろん私たち人もその恵みをうけて生活しています。

湿地は、食べ物や水を与え、地球環境を私たちが住みやすいように保ち、時には自然災害の被害を減らしてくれます。また、美しく多様な湿地の姿は私たちを魅了し、楽しませてくれます。

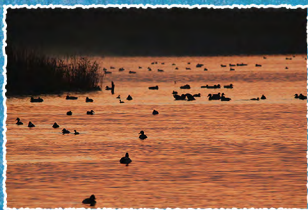
将来にわたってその恵みを受け続けるためには、湿地を健全な状態で守っていく必要があります。しかし今、湿地は世界中で急激に減少しています。

湿地とは、「湿った場所」のことで、水を含んだり、水でおおわれた場所のことを言います。

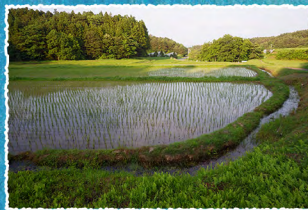
図のように、湿地にはさまざまな種類があります。私たちになじみの川や池、田んぼも湿地の仲間です。



干潟



池



田んぼ



サンゴ礁

湿地の恵み、お金に換算してみよう

湿地はたくさんの恵みをもたらしてくれるため、それらをすべてお金に換算することは難しいですが、湿地の価値や重要性を示す一つの根拠になっています。2014年に環境省が実施した試算によると、日本全体での湿原の経済的価値は年間約8000～9700億円、干潟では約6000億円といわれています。

渡り鳥が つなぐ 湿地

湿地には多くの渡り鳥が暮らしています。

渡り鳥は春になると子育てのために北に向かい、秋になると冬を越すために暖かい南へと渡っていきます。毎年、海を越え、国境を越えて何千キロも旅をするのです。

夏

繁殖地

餌の多い季節に
子育てする

春

中継地

旅の途中で休憩し
栄養を補給する

冬

越冬地

暖かい地域で
冬を越す

渡り鳥の旅のルート

渡り鳥たちは、毎年決まったルートを通して旅をします。その渡りルート全体のことを「フライウェイ」と呼びます。世界中には全部で9つのフライウェイがあります。

フライウェイは多くの国にまたがり、多様な湿地が含まれます。渡り鳥たちはそれらの湿地をつないで旅をします。

ここで紹介するフライウェイは、アラスカ・ロシア東部から、東・東南アジア、オーストラリア・ニュージーランドにまでおよぶ地域で、「東アジア・オーストラリア地域フライウェイ」と呼ばれています。ここには、世界の9つのフライウェイの中で、最も多くの水鳥が生息しています。しかし、環境破壊や密猟などにより、絶滅の危機にある種も少なくありません。

渡り鳥を守りことは、湿地を守りこと

渡り鳥は、湿地の生態系を健全に保ってくれている大切な存在です。彼らと、その生息地である湿地を守ることは、私たち人の豊かな暮らしにつながります。

広大な地域にまたがって、子育て・渡り・冬越しをしながら生きる彼らを守るためには、多くの国や関係機関・団体が協力し、フライウェイ全体で湿地の保全に取り組まなければなりません。

渡り鳥と共に暮らす 日本の湿地

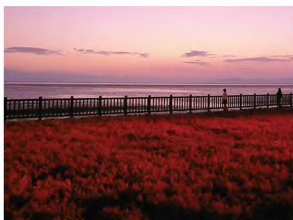
3選

日本は水に恵まれた国で、かつては一面に広がる湿地がたくさんありました。近年その多くが開発等によって失われましたが、今でも残っている湿地は渡り鳥や様々ないきものの生息地となっています。

そんな日本の湿地の中から、湿地の恵みを活かした取り組みをしている3つのサイトをご紹介します。

① 東よか干潟

東よか干潟は有明海の干潟の一部で、佐賀市の南部に位置する泥の干潟です。シギ・チドリ類をはじめとする渡り鳥が訪れ、海岸沿いには希少な植物のシチメンソウが群生し、干潟にはムツゴロウやワラスボ、シオマネキなどの有明海特有のいきものが生息しています。



紅葉するシチメンソウの群落



大きな群れになるハマシギ



干潟の人気者、ムツゴロウとシオマネキ



シギ・チドリ類の多くは、シベリアやアラスカで繁殖し、東南アジアやオーストラリア地域で越冬します。その渡りの途中で日本に立ち寄り、羽を休めます。

東よか干潟のシギ・チドリ類の渡来数は日本一を誇ります。干潟の豊かな自然が、彼らの渡りを支えているのです。



様々な渡り鳥で賑わう干潟

湿地の恵みを活かす取り組み

シギの恩返し米

東よか干潟近くの田んぼでつくられたお米で、自然といきもの、そして人がいつまでも共生することを目指して作られています。農薬や化学肥料の使用量を減らした特別な栽培方法でつくられており、ダムの底の土や下水由来の肥料を使用した、自然にやさしくおいしいお米です。



シギの恩返し米

佐賀海苔

言わずと知れた有明海の名産品です。有明海は、多くの河川からミネラル豊富な栄養塩が流れ込むため、豊かな漁場となっています。そのような干潟の近くでとれる佐賀海苔は、香り豊かに口どけ滑らか、とろけるような甘みがある極上の逸品です。



海苔の養殖風景

シギの恩返し米に関する
詳しい情報はこちらから



やしろ ② 八代

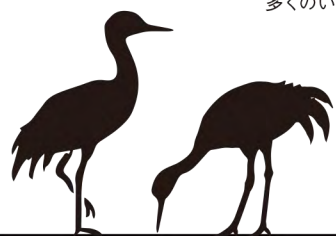
山口県周南市の八代は、本州で唯一、ナベヅルが定期的に渡来する越冬地で、日本の自然保護発祥の地とも呼べる地域です。

この地域の人々は、江戸時代から毎冬渡ってくるツルを大切にしていました。近代になると、明治20年(1887年)当時の山口県令において地域内でのツルの捕獲が禁じられ、大正10年(1921年)には天然記念物第一号、昭和30年(1955年)には全域がツルの渡来地として特別天然記念物に指定されました。実に130年を超えて、地域全体で自然保護活動を行っています。



多くのいきものを育む八代の田園風景

ナベヅルの名前の由来は、体が鍋の底の墨のように黒いことから。



— 湿地の恵みも活かす取り組み —

八代地域の湿地は、ツルの他にも多くのいきものを育てています。使用する農薬の量を減らしたり、多自然型の水路を取り入れるなど、ツルの生息環境に配慮した田んぼの整備をおこなうことにより、タガメやホタルなど多くの水生生物がすむことができる環境を守っています。

また、冬にはツルとともに、様々な渡り鳥がやってきます。



ツルと同じく田んぼを利用する渡り鳥、タゲリ



(左) 田んぼの水路で育ったホタルの乱舞

(下) 今では絶滅危惧種となったタガメ



多自然型の水路

湿地は私たちに憩いの場や学びの場を提供してくれます。八代地域にある周南市立八代小学校では、ナベヅルが冬を越す環境をいかし、地域と連携をしながら環境学習や保護活動をおこなっています。「自然保護発祥の地」の住人として、一人ひとりが誇りをもって、ツルや自然環境の保全に取り組んでいます。



(左上) 「ツル日記」を作成するためにツルを観察している様子

(右上) ツルを誘引するためのデコイの設置作業

(左下) 水辺のいきものを観察する様子



かぶくり けじょ
③ 蕪栗沼・化女沼

宮城県の北部に位置する大崎市には、蕪栗沼と化女沼があります。両湿地は“ダム”や“遊水池”として増水時に水をため、その水は、周囲の水田地帯で農業を行うために利用されています。同時に、これらの湿地は多くの水鳥の生息地でもあります。

2つの沼と、その周辺の広大な水田地帯はガン類の重要な越冬地になっています。冬の間ガンは主に沼をめぐらして利用し、日中は周辺の田んぼで餌をとります。

国内で冬を越すマガンの9割が宮城県北部を利用し、シジウカラガンの国内最大の越冬地にもなっています。

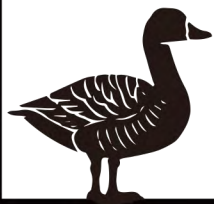
ガン類の渡りルート



蕪栗沼から飛び立つガンの群れ



化女沼に広がるハス



湿地の紹介動画
 はこちらから。



蕪栗沼とガン



化女沼とガン



田んぼとガン

同サイトでは他にも
 いきものことや
 農業のこぼれ、
 動画で色々紹介して
 います。

— 湿地の恵みを活かす取り組み —

蕪栗沼・化女沼のある大崎地域一帯は全国有数のお米の産地です。冷害や洪水に対応するための水管理システム、いきものとの共生関係、文化や特徴的な景観が評価され、「大崎耕土」の名で世界農業遺産にも認定されています。また、お米のブランド認証がおこなわれており、認証制度の要件としていきもの調査が生産者によっておこなわれるなど、自然と共生する取り組みが進められています。



大崎耕土のブランド米「ささ結」



その一例が「ふゆみずたんぼ」です。これは、冬の水田に水を張ることで、浅い湿地をつくり、ガン類の“ねぐら”や休息の場を増やすための農家の取り組みです。またそうすることで菌類やイトミミズ、有益ないきものが増え、雑草抑制、害虫防除など、田んぼにとっても良いことがあります。農薬や化学肥料を使わずに栽培することができ、人にとっても渡り鳥にとっても安全・安心な良質米となっています。



(上) マガン
 (下) ふゆみずたんぼでとれたお米「ふゆみずたんぼ米」



ふゆみずたんぼと
 渡り鳥

ふゆみずたんぼ米の購入や
 詳しい情報はこちらから。

